



チャイルドルームの様子。利用者した選手 OG からは、「女子バンカレなどでもチャイルドルームがあれば、私たちもお手伝いができてうれしい」といった反応もあったという (photos by Sachie Hamaya)

みんな利用してください！ 国体会場の「チャイルドルーム」

国体のチャイルドルームをご存知ですか？ 乳幼児を預かる施設が国体には準備されているのです。乳幼児を持つ選手が他の選手と同条件でレースに参加できるようにサポートするものですが、選手だけにとどまらず、運営役員、応援の家族にも利用してもらい、1人でも多くが国体に参画できるようにと企画されています。

国体会場でのチャイルドルーム設置は、平成 13 年 9 月、「よさこい高知国体リハーサル大会でのチャイルドルーム設置に関する要望書」を日本セーリング連盟と国体委員会の昇委員長に提出、承認され、トライアルとして始まりました。そして、翌平成 14 年の「よさこい高知国体セーリング特設会場」において正式に設置されました。

「セーリング競技会場に国体初のチャイルドルーム」ということで、NHK、地元テレビ、新聞などメディアから想像以上の反響があり、大好評のもと歩みだしました。

その後、国体で「チャイルドルーム」を設置するにあたっては、毎年、開催県との折衝、打ち合わせ、密度の濃い話し合いを行い、順調に継続しています。

一方、JOC、日体協、NPO 法人ジュース（スポーツ関わる女性を支援する会）などに働きかけ、当時の参議院議員国務大臣で JOC 理事の小野清子氏に支援をお願いしました。また平成 18 年 5 月、熊本市で開催された世界女性スポーツ会議に出席し、男女差別なく競技ができるよう競技会場における「チャイルドルーム」の設置を推進するようとの広報活動を行いました。

一方、それまでの活動が評価され、平成 21 年から JOC 女性スポーツ専門委員会委員に推挙され就任しました。女性が結婚後に子育てしながらスポーツを続けていくにはどうすればよいかという課題はどのスポーツも共通で、JOC スポーツ担当者会議などで常に議論の中心となります。その結果、セーリング競技の「チャイルドルーム」は多大な関心を獲得ようになりました。

平成 22 年 3 月 16 日に開かれた JOC 第 3 回女性スポーツ専門委員会会議のテーマの中心はやはり既婚の女性アスリート（オリンピック選手も含む）の子育てと競技の継続問題でした。

委員会会議の議長でもあり女性スポーツ専門委員会委員長の平松純子氏が、セーリング連盟では早くから女性アスリートが男女区別なく競技に参加できるように「チャイルドルーム」を設置しているとの紹介があり、それについて説明をしたところ、同席していた IOC 並び JOC 委員の猪谷千春氏よりご質問をいただいたうえで、先駆者として立派な事であり、スポーツ界に貢献をしている、頑張してほしいとの高い評価を得ました。

また、委員会に出席されていたバレーボールの荒木田裕子氏や柔道の田辺陽子氏から今年からできる限りチャイルドルームの設置を実施したいという発言も出しました。

とはいえ、実際のチャイルドルームの現場はなかなか大変です。

最初のころは、チャイルドルームを開いたものの、利用してくださる方が少なく、会場のあちこちを歩き回って乳幼児を連れてくる家族を探し回るようなこともありました。また、ある会場ではメディアの取材があるというのに利用者がいないとなって、選手 OG に声をかけて急遽、チャイルドルームを利用してもらい、言ってみればサクラのようなことまでお願いするようなドタバタを演じ、今にして思えば笑える苦労話もありました。

保育士スタッフを確保するのに一苦労することもあれば、地元の保育園の園長さんにスタッフとして



加わっていただき、そのご縁もあって多くの親子連れがチャイルドルームを訪ねてくれたこともありました。

印象的だったのは埼玉国体です。チャイルドルームの利用者がこれまでの最高となったのがこの会場でした。ベッドタウンを抱え若いファミリー層が多い土地柄であることが要因でしたが、立地条件も良く、スポーツ競技とは違う異なった国体の側面を見られるような思いをしたこともあります。

このように、「チャイルドルーム」を最初の実施してから 10 年あまりが経過いたしました。ゆくゆくは、「セーリングは子連れで行っても安心」「オリンピックは子連れで参加しても安心」と言われるようグローバルな視点でも考えています。それには、今後とも継続できるよう国体委員会のご指導、開催県との折衝、書類等の見直し、規約の内容等を精査し、事故のないよう安全に充分留意して運用できるよう努めたいと思います。

最後にこの事業にご協力いただいています各都道府県国体実行委員会及び都道府県連関係者の皆様、保育士の先生方、ボランティアの方々に深く感謝いたしますとともに、(財)日本セーリング連盟の皆様のご協力を今後も続けて賜りますようお願い申し上げます。(倭 千鶴子/JSAF レディース委員会委員長)